



## 弥生の出雲王に出会える

季刊

第60号

(2026年1月)



## 出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

## ★春季企画展

## 「須佐神社の本殿」

2月14日(土)～5月11日(月)

出雲市佐田町に位置する須佐神社は、須佐之男命の本宮とされ、古くから篤い崇敬を集めてきました。現在の須佐神社本殿は、文久元(1861)年に造営された大社造の社殿です。江戸時代後期の大社造の典型をなす大規模な神社建築として、昭和41(1966)年に島根県有形文化財に指定されました。

修理を終えた本殿  
須佐神社

造営から一六〇年余りの間、幾度も修理が行われ、今に伝わる本殿は、前回の修理から30年近くが経過し、屋根を中心に腐食や破損が進んでいました。このたびの「令和の御遷宮」事業により、令和6・7年度において本殿の修理工事が実施され、令和7年10月末に完了しました。

今回の保存修理とともに出雲市で行った関連の古文書等の調査の

成果も踏まえ、須佐神社の本殿の歴史に迫る企画展を開催します。

出雲市指定文化財  
「須佐神社の棟札」

今回の展示で注目の史料は、令和7年7月に新たに出雲市文化財に指定された「須佐神社の棟札」(45点)です。須佐神社には、鎌倉時代後半の永仁6(1298)年から、昭和44(1969)年に至る膨大な数の棟札が残されています。

一般的に棟札とは、新築や再建・修理が完了した際に、工事の由緒、建築の年月日、建物名、建築者(願主)や大工などの職人の名前などを記して、棟木に打ち付けた板のことです。古くは棟木の下面に直接記す例が多いですが、鎌倉時代の中ごろ(13世紀)から棟札が増え、南北朝時代(14世紀)以後には一般的なものとなりました。棟札は、造営・遷宮という最も重要

な出来事の記録として多くの寺社に伝わっています。しかし、実際には火災・水害などの災害や虫食いなどによって、失われることも珍しくありません。その中にある須佐神社では中世から現代に至る多くの棟札が、大切に保存されてきました。このことは極めて貴重であり、大いに注目されます。

須佐神社の棟札の重要性は、まずは量的な多さですが、さらに個々の棟札の保存状態の良さと、内容的な豊かさ・重要性も挙げられます。造営者として、本城氏・熊谷氏など中世須佐郷の領主に加え、尼子氏・堀尾氏・松平氏など歴代の出雲国守の名前が確認できます。須佐神社の歴史を目に見える形で今日に伝える生証人と評価することができそうです。

(吾郷 誠)

## ★春季企画展関連講演会のご案内

① 3月8日(日) 14時～16時

「棟札から見る中世の須佐神社」

● 講師 井上寛司 氏

〈島根大学名誉教授〉

② 3月28日(土) 14時～16時

「須佐神社と松江藩家老・大橋家」

● 講師 新庄正典 氏

〈松江歴史館 主任学芸員〉

## ★ギャラリー展

## 「日御碕神社と

徳川家光・松平治郷」

11月26日(水)～3月9日(月)

この夏、奈良市の春日大社で特別展「究極の国宝 大鎧展―日本の工芸技術の粋を集めた甲冑の美の世界―」が開催され、国内に現存する国宝甲冑類の半数以上が一堂に会しました。

その一つに並んだのが、日御碕神社の「白糸威鎧」です。明治37(1904)年に国宝に指定され、現在は東京国立博物館で保管されています。

今回、その展覧会開催を受けて、このギャラリー展を企画しました。とりわけ、日沉宮・神の宮などの社殿(国重要文化財)造営を命じた将軍・徳川家光と白糸威鎧の修理を命じた松江藩主・松平治郷との関係に注目します。

日沉宮・神の宮などの現在の社殿は、家光が寛永11(1634)年に造営を承認し、同12年、当時の松江藩主・京極忠高に命じて造営が始められたものです。その後、同藩主・松平直政のとき、寛永20(1643)年に完成し、同21年に遷宮が行われました。この社殿造

営の承認は家光の動向とリンクしており、展示ではその背景に迫ります。

また、「白糸威鎧」は当時、源頼朝が寄進したものと考えられていました。治郷はこの鎧の修理を命じ、古い部材を活用する現在の文化財保護にも通じる方針で行われました。その修理は文化2(1805)年に仕上げられました。当時の治郷の動向を見ると、その背景には治郷の嫡男・斉恒との関係があることが窺えます。展示では、その関係について考えます。

今回はパネルのみの展示ですが、日御碕神社と家光・治郷をめぐる歴史に思いをはせて頂ければと思います。

(高橋 周)



日御碕神社日沉宮・楼門(国重要文化財)

## ★速報展

## 「古志本郷遺跡第15次発掘調査」

2月4日(水)～5月25日(月)

古志本郷遺跡は、出雲市古志町に所在する、弥生時代から続く集落遺跡です。その一帯に広がる「古志遺跡群」を構成する主要な遺跡でもあります。今回の速報展では、2025年春に古志コミュニティセンターの北北西約100mの地点で実施した発掘調査の成果を紹介します。

発掘調査では、弥生時代・奈良時代・戦国時代以降の生活跡を確認しました。特に注目されるのが、弥生時代中期後葉(約2000年前)の「堅穴建物跡と土坑墓です。堅穴建物跡は二重の円形溝の中に4本の柱穴が掘られていたもので、中央には炉の可能性がある掘り込みも確認できます。調査地周辺では、これまでに計10棟の弥生時代の堅穴建物跡が発見されていて、新発見の堅穴建物跡はその北端にあたります。弥生人たちの居住域がさらに広がることがわかりました。また、堅穴建物跡の西方約30mで発見した土坑墓からは、装飾性に富んだ「脚台付鉢形土器」が出土しまし

た。これは広島県の山間部を中心に流行した祭祀や埋葬用の弥生土器で、県内では非常に珍しいものです。

古志本郷遺跡での新発見の数々、この機会にぜひご覧ください。

(須賀照隆)



脚台付鉢形土器



堅穴建物跡(外溝径約6m)



## ★体験教室

## 「レジンで勾玉づくり!!」

昨年度に引き続き、レジンを使った勾玉づくりの体験教室を開催します。

光で固まるUVレジンを使い、出雲弥生の森博物館オリジナルの勾玉を作ります。

皆さまのお申し込みをお待ちしています。

●講師 あるばか

(三上 純子さん)

周藤ひとみさん

佐名木雅美さん

●日時 2月14日(土)

【午前の部】10時～

【午後の部】14時～

●定員 40名 ※先着順

(午前の部、午後の部 各20名)

●無料

●要予約(電話・メール)

※小学4年生以下は保護者同伴必須



作品例

## ★渡邊名誉館長、

## 秋の叙勲にて受章

渡邊貞幸名誉館長が、11月3日付で発表された秋の叙勲にて、瑞宝中綬章を受章されました。

渡邊名誉館長は、島根大学法文学部教授や同大学の附属図書館長を歴任され、考古学を中心に、教育・研究の分野で長きにわたり尽力されました。

当館においては、2017(平成29)年3月まで館長を務められ、地域の人々に親しまれる博物館づくりに際し、大きく貢献されました。

渡邊名誉館長、このたびの叙勲、誠にありがとうございます。



渡邊貞幸名誉館長  
(過去の講座のようす)

## ★古文書の森をゆく(25)

## 棟札は情報の宝庫

このたび、佐田町の須佐神社の棟札(45点)が市の有形文化財に指定されました。

棟札とは『国史大辞典』によると、「上棟式のとき、建物名・願主・工匠名・上棟年月日などを書いて、棟木に打ちつけた板」とあります。特に神社には建立や建て替え、修理など工事の際に作られた棟札が多く残っています。

では、棟札から何がわかるのでしょうか。まず、棟札は工事のたびに作られたので、棟札からその建物の歴史がわかります。

そして、棟札のほとんどには発起人やスポンサーである願主や檀那の名前が書かれています。江戸時代より古い、中世の棟札には戦国武将などの名前が見つかることがあるので、その地域でどのような人物が力を持っていたかを知ることが出来ます。

中世の棟札に見られる特徴としては、「天長地久」や「国土豊穰」などの地域の安寧、檀那や願主の「武運長久」や「一門繁栄」を願う文言が入っていることです。檀那や願主が何かしらの願いを込め

て神社の造営や修復をしていたことがわかります。

また、神社の棟札には仏教の経文や梵字が書かれているものも多く見られ、「神仏習合」という宗教のあり方を示しています。

江戸時代の棟札では、松江藩が修繕を指揮した神社の棟札には藩主や家老、工事を担当した藩の役人の名前が書かれました。地域の神社の棟札には村役人や氏子・檀家、大工や鍛冶の職人など、多くの関係者の名前が書かれています。これによって、どのような人がその地域にいたのかを知ることが出来ます。

このように棟札は当時の地域の状況や人々の様子を知る、貴重な手がかりとなっています。

2月からの企画展では須佐神社の棟札を展示します。ぜひご覧ください。

(赤木 薫)



須佐神社棟札(文久元年)

## ★展示のご案内

## ▼春季企画展

2月14日(土)～5月11日(月)

「須佐神社の本殿」

## ●ギャラリートーク【無料】

2月15日(日)、3月8日(日)、

4月5日(日)

いずれも10時から・申込不要

## ▼ギャラリー展

開催中～3月9日(月)

「日御碕神社と

徳川家光・松平治郷」

## ●ギャラリートーク【無料】

2月28日(土)

いずれも10時から・申込不要

## ▼速報展

2月4日(水)～5月25日(月)

「古志本郷遺跡第15次発掘調査」

## ★講座・講演会のご案内

## ▼ギャラリー展関連講演会

① 1月17日(土) 14時～16時

「日御碕神社の国宝「白糸威鎧」

からのメッセージ」

●講師 佐藤 寛介氏

〈東京国立博物館 特別展室長〉

ギャラリー展関連講演会の申込について

定員各80名／無料

事前申込必須(電話・メール・FAX)

●必須事項 氏名・電話番号

## ▼出雲弥生の森博物館

開館15周年記念特別講演会

1月24日(土) 14時～16時

「拡大する人口減少社会！遺跡

を大事にする地域をどのように

つくっていくのか」

●講師 村上 恭通氏

〈愛媛大学先端研究院 アジア

古代産業考古学センター教授〉

出雲弥生の森博物館開館15周年記念

特別講演会の申込について

定員各80名／無料

事前申込必須(電話・メール・FAX)

●必須事項 氏名・電話番号

## ▼プロが語る！出雲の歴史・文化財講座

① 2月21日(土) 14時～16時

「出雲の仙像―その時代と造形」

●講師 的野 克之氏

〈島根県立石見美術館 館長、

松江歴史館 学芸専門監〉

② 3月7日(土) 14時～16時

「中世製鉄技術の革新と鉄特産

地の形成」

●講師 角田 徳幸氏

〈雲南市教育委員会文化財課 課長〉

プロが語る！出雲の歴史・文化財講座

の申込について

定員各80名／各回300円

事前申込必須(電話・メール・FAX)

●必須事項 氏名・電話番号

## ★館長古来夢

今年は午年。午ということで思  
い出されるのは、奈良県明日香村  
キトラ古墳の壁画だ。石棺式石室  
の四方の壁に、玄武(北)、青龍  
(東)、朱雀(南)、白虎(西)が描か  
れる。四神はそれぞれ、黒、青、赤、  
白がシンボルカラーだ。

ちなみにこの四色は、大相撲に  
今も受け継がれている。本場所の  
土俵に懸かる神明造の吊屋根四隅  
には、四本の房が下がる。その色  
は四神の色であり、土俵の守護を  
象徴する。大相撲の起源は両国  
回向院の境内で始まった勧進相撲  
(1768年以降)。浄土宗の回向  
院自体は江戸の町を焼き尽くした  
明暦の大火(1657年、振袖火  
事)の死者を弔うため建立された。

ここへの参拝者のために架けられ  
たのが武蔵と下総をつなぐ両国橋。  
話をもとに戻すと、キトラ古墳  
の四神の下には各壁三体ずつの獸  
頭人身の十二支像が描かれてい  
た。北壁中央の子像に始まり、そ  
の右に丑像、東壁には北に寅像、  
西壁の北には戌像、そして北壁の  
左側に亥像を確認できた。東壁と  
西壁の南半そして南壁は流入した  
土砂に覆われ像は見えなかった。

壁画は石室石材の上に漆喰を  
塗った上に描かれている。壁画の  
保存作業では、この漆喰を表面の  
泥ごと剥ぎ取った。これら剥ぎ取  
り資料を調査する中で、南壁中央  
下部の「泥薄片」に午像が残され  
ていた。長い年月の間に、漆喰表  
面の顔料が非常に細かい泥の層に  
移り、漆喰上には赤い顔料の痕跡  
が残るのみだった。よって、現在  
確認できる午の姿は、泥の上に  
残った鏡像。頭は馬の姿で、裾の  
長い赤い着物を着て、右手には幡  
(旗)のような房飾りがついた槍状  
の武器を持っている。午像は公開  
されていないが「キトラ古墳壁画  
体験館・四神の館」ホームページ  
で鮮やかなその姿をぜひ見てほし  
い。(花谷 浩)

## (発行) 出雲弥生の森博物館

2026年1月

〒693-0011

島根県出雲市大津町2760

(TEL) 0853-25-1841

(FAX) 0853-21-6617

(E-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp

https://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

●入館料／無料

●開館時間／9:00～17:00  
(入館は16:30まで)●休館日／火曜日  
(祝日の場合は翌平日)  
年末年始